

森と水の記憶

－ウィーン周辺部の伝説について－

小 谷 一 夫

人間環境部門

Erinnerungen an Wald und Wasser － Wiener Sagen vor der Stadtmauer －

Kazuo KOTANI

Zusammenfassung

Wien, eine der ältesten Städte in Mitteleuropa, hat zahlreiche Sagen. Besonders in der Inneren Stadt gibt es naturgemäß viele berühmte Sagen, aber in den anderen Stadtbezirken, also den ehemaligen *Vorstädten* und *Vororten*, werden auch nicht wenige Sagen überliefert. Sie stehen oft im Zusammenhang mit den historischen Persönlichkeiten (z.B. mit den Babenbergern oder den Habsburgern) und Begebenheiten (z.B. mit der Pest, mit der Türkenbelagerung). Dabei ist zu bemerken, dass der Wald oder der Fluss nicht selten eine gewisse Rolle spielen. Außerdem findet man hier recht viele Sagen, die von den überirdischen Wesen im Wald und am Wasser erzählen. Sie bringen den Menschen einerseits Unheil (z.B. der Lindwurm auf dem Kahlenberg, das Wassermännlein in der Wien), andererseits Glück (z.B. der Schimmelreiter auf der Jägerwiese, die Fee am Agnesbründl). Das hängt bestimmt mit der Wirklichkeit eng zusammen, dass für die Wiener die Wälder und Gewässer in ihrer Umgebung sowohl als gefährliche Orte wie auch als nutzbringende Orte seit jeher von großer Bedeutung waren. Diese widersprüchliche Rolle, die die umliegende Natur von Wien spielte, kommt in einer der berühmtesten Wiener Sagen „Das Donauweibchen“ zum Ausdruck, denn die Wassernixe lockt mit ihrem bezaubernden Gesang Jünglinge in die Donau, während sie auch mit ihrer rechtzeitigen Warnung das ganze Fischerdorf vor dem herannahenden Hochwasser rettet.

I.

1816年に『ドイツ伝説集』(„Deutsche Sagen“) 上巻を刊行したグリム兄弟は、序文第1節「伝説の本質」のなかで、次のように述べている。「[伝説は]よく知られたもの——ある場所や歴史上実在した人物などとの結びつきを特徴とする。[...]ある土地の自然や歴史に見られる奇異なるもの、人間の感覚にとって不可思議なるもののまわりに伝説や歌謡が寄り集ってかぐわしい香が漂う。それは空が青く澄み渡るころ果実や花にうっすらと細かい粉が置くことにも喩えられよう。岩や湖や廃墟や樹木や草花と親しく交わって暮すうちに、これらのものと人間の間に、対象の特徴に基づいた結びつきが生れ

る。この結びつきの中から人間はある瞬間これらの対象の語る不思議を聞きとる権限を手に入れるのである。こうして生れた絆がいかに強いものであるか、それは素朴な人間が故郷を離れた時に感じるあの心も裂けんばかりの郷愁の念によっても明らかである。」¹⁾

神話、昔話とともに口承の物語のひとつである伝説は、現在では一般に、以下のような特徴を持つものとされている。「①昔話のように初句・結句といった形式をもたない。②特定の時代や人物・土地など具体的な事物に結びつく。③伝説を信じる人々によって伝えられている。」²⁾

したがって、ある土地にまつわる伝説とはその土地についての人々(共同体)の記憶の謂いであり、また、あ

る土地伝説の存在は、共同体の成員とその場所との強い心理的つながりを示しているのである。

中欧の古都ウィーンにはじつに多数の伝説が存在する。19世紀半ばまで市壁に囲まれていた旧市街、すなわち、ウィーン第1区インネレ・シュタット (Innere Stadt) には、ケルトナー通りとグラーベン通りが交わる角に現在も残るシュトック・イム・アイゼン (Stock im Eisen) にまつわる伝説、シェーンラテルン小路のバジリスク伝説など、今なおよく知られた伝説がいくつもあるが、旧市街の周辺地域についても少なからぬ数の伝説が残されている。本稿は、それらウィーン周辺部の伝説にみられる特徴とそれらが意味するものを考えながら、ウィーン人の集合的記憶の一端を探ろうとするものである。³⁾

II.

言うまでもなく、伝説と史実とは相異なるものであるが、伝説のなかには歴史上の人物や出来事と密接に関係しているものが少なくない。ウィーン周辺部においても、そうした類の伝説はかなりの数にのぼる。

歴史上の人物にまつわる伝説のなかでまず挙げられるのは、長年にわたってオーストリアを支配したハプスブルク一族、さらには、それより以前にこの地を治めていたバーベンベルク一族に関わるものである。

例えば、ウィーン西部の第14区ペンツィング (Penzing) には、ハプスブルクのルードルフ4世 (Rudolf IV, 1339-1365) にまつわる次のような言い伝えがある。14世紀の半ば、ヒュッテルドルフ (Hütteldorf) のある水車小屋に魔女が棲みつき、さまざまな秘術によって住民の心をつかみ、ついには若い司祭までもが彼女に心酔するに至った。敬虔なキリスト教徒であったルードルフ4世は、魔女と司祭のふたりを捕らえてドナウ川で溺死させるよう命じた。死刑執行前に臨終の秘蹟を受けることさえ許されなかった司祭は、ルードルフが年内に絶命するとの呪いの言葉を残して死ぬ。実際ルードルフはその年のうちに不帰の客となったのである。⁴⁾ また、ウィーン旧市街の北に位置する第20区ブリギッテナウ (Brigittenau) は、地名そのものが皇帝フェルディナント2世の息子であったレーオポルト・ヴィルヘルム大公 (Erzherzog Leopold Wilhelm, 1614-1662) と深い関係がある。昔この辺りはドナウ川沿いに広がる広大な水郷地帯の一部であったが、三十年戦争時には、侵攻してきたスウェーデン軍との間に激しい戦いが繰り広げられたところであった。皇帝軍側の最高司令官を務めていたレーオポルト・ヴィルヘルム大公は、戦況を視察するため、戦闘の合い間をぬって前線を訪れた。幕舎で一夜を

明かした大公が朝の祈りをささげていたまさにその時、一発の砲弾が天幕を突き破って彼の目の前に着弾した。しかし、幸運にも砲弾は爆発せず、大公は九死に一生を得たという。戦争終結後、神の御加護に感謝の念を表わすべく大公がこの地に建立したのが、スウェーデンの聖人ブリギッタにその名が由来するブリギッタ礼拝堂 (Brigittakapelle) であると言われている。そして、それが現在の区名にもなっているというわけである。⁵⁾

バーベンベルク家のレーオポルト5世 (Leopold V, 1157-1194) が「獅子心王」(the Lion-Hearted) の異名をもつイギリス王リチャード1世 (Richard I, 1157-1199) をドナウ河畔のデュルンシュタイン (Dürnstein) 城に幽閉し、解放と引き換えに多額の身代金を得たのはよく知られた話であるが、リチャード獅子心王が捕らえられたのは、ウィーン旧市街から南東方向に延びる第3区ラントシュトラッセ (Landstraße) だったと伝えられている。

十字軍遠征からの帰途、乗っていた船が難破したリチャード王は、やむなく陸路祖国を目指すことになった。対立関係にあったレーオポルト5世の目を逃れるため、一行は巡礼者を装い、また、異国の貨幣を使って身元が割れるのを恐れて、食料の調達さえもままならない困難な旅路であった。こうして、空腹に苛まれながら、ウィーン近郊のエルトベルク (Erdberg) 村までやって来たとき、一軒の館の前に人々が集まっているのが見えた。厨房からは美味しそうな匂いが漂っていた。リチャード王は自ら厨房の中まで入っていき、食べ物に分けてもらえないか、料理番に尋ねた。「支払う金がない」と言うと、「昼食の用意を手伝ってくれば、後で肉を少し分けてやろう」と言われる。こうして、リチャード王はそこで串刺しの肉を焼く仕事を与えられたのだった。やがて館の主の昼食が済み、仕事が一段落したとき、突然厨房に主が現れた。なんと、それはレーオポルト5世だった。そこは彼の狩りの館だったのである。いくら巡礼者を装っていても、かつてイスラエルのアコンで共に戦ったレーオポルト5世の目をごまかすことはできなかった。リチャード1世は無言のままマントの下に隠し持っていた剣をレーオポルト5世に渡したのであった。⁶⁾

リチャード1世の身元が露見した具体的な経緯については、獅子心王を見破ったのはレーオポルト自身ではなく狩りの館の料理長であったとか、また、獅子心王が立ち寄ったのは狩りの館ではなく、エルトベルクの旅館であって、高価な指輪を外し忘れていたために偶然そこに居合わせたレーオポルトの従者に正体を見破られたのである等、他にもさまざまな言い伝えが残されている。⁷⁾

ヨーロッパ有数の宮廷都市であったウィーンには、さ

さまざまな才能を持った人間たちが集まり活躍した。ウィーン周辺部の伝説のなかには、芸術や学問の諸分野においてその名を知られた人物が登場するものもある。ウィーン宮廷で活躍した詩人の一人、ナイトハルト・フォン・ロイエンタール (Neidhart von Reuenthal, 1185-1240頃)、ウィーンをはじめヨーロッパ各地にその足跡が残る医者であり、また学者であったパラツェルズス (Paracelsus, 1493-1541) にまつわる伝承がそれである。

その昔ウィーンで行われていた春の行事の一つに「スマレ祭り」(Veilchenfest) という風習があった。毎年最初にスマレの花を見つけた者は、自分の帽子を花に被せたくて、すぐさま大公に報告する。すると大公は、大公妃、廷臣、楽士、さらには、ウィーン市民を引き連れて、発見場所を訪れる。そして、そこで人々は歌と踊りにうち興じ、皆で春の到来を祝ったのである。ある年のこと、ウィーン北部から北西部に広がる第19区デープリング(Döbling)にあるカーレンベルク (Kahlenberg) 山の山腹を歩いていたナイトハルト・フォン・ロイエンタールは、その年初めてのスマレの花を発見する幸運に恵まれた。ナイトハルトから知らせを受けた大公は、さっそく大勢のお供を引き連れて、カーレンベルク山までやって来た。大公は嬉しそうに詩人の帽子を拾い上げたが、彼の目の前に現れたのは芳しいスマレの花ではなく、異臭を放つ人糞だった。大公たちが怒って引き揚げた後、ナイトハルトは山麓のハイリゲンシュタット (Heiligenstadt) で子供たちが1本の棒を真ん中に踊っているのを目撃する。棒の先端には、なんと件のスマレの花が挿してあった。すべては、農民たちを揶揄する詩を書くことが少なくなかったナイトハルトに対する農民の仕返しだったのである。⁸⁾

北西部の第17区ヘルナルス (Hernals) には、まだ医学生であった若い頃のパラツェルズスに関する次のような言い伝えがある。ある日薬草を探しにノイヴァルデック (Neuwaldegg) の森へと出かけたパラツェルズスが古いオークの木の下で休んでいると、木の中から「助けてくれ」という声が聞こえてきた。声の主は悪魔で、悪魔祓いによってこの木の中に封印されたのだという。「助けてくれたら、お礼に何でも望みをかなえてやろう。もちろん魂も何も要らない」と悪魔は必死である。どんな病気も直すことができる薬とどんな物も黄金に変えることができるチンキが欲しいとパラツェルズスが言うと、「承知した」という返事が返ってくる。そこで彼は木の節をふさいでいた栓を引き抜いてやった。なかから這い出てきたのは一匹の黒い蜘蛛であった。蜘蛛は次の瞬間、帽子をかぶり、剣をさげたユンカーに姿を変えたかと思うと、約束の薬とチンキを医学生に渡し、こう叫んだ。

「悪魔祓いの野郎め、さあ、ひっつかまえてやる。」急に悪魔祓いのことが心配になり出したパラツェルズスは一計を案じる。彼は、さも悪魔の力に感銘を受けたかのように、もう一度蜘蛛の姿に変身してみせたいと頼み込む。そして、彼の口車に乗せられて蜘蛛に戻った悪魔を、再びオークの木に封じ込めてしまったのである。パラツェルズスはその後高名な医者として活躍したが、それはこのとき手に入れた薬とチンキのおかげだったのである、と伝説は伝えている。⁹⁾

歴史上の出来事にまつわる伝説のなかで挙げられるのは、かつて人々に黒死病と恐れられ、ウィーンでも幾度か猖けつを極めたペスト禍、そして、1529年と1683年の2回にわたるオスマン・トルコのウィーン包囲に関係したものである。

ペストと関わるものには有名な「愛しのアウグスティン」(der liebe Augustin) の伝説がある。17世紀後半、ペストに見舞われていたウィーンの街にアウグスティンという名前の流しの歌手がいた。暗い世相の中、自らバグパイプを演奏しながら酒場をまわり、陽気な歌でつかの間ながらも世の辛さを忘れさせてくれる彼は、人々にたいへん人気があった。ある夜、街中の酒場で深酒をし、酔っ払って帰途についた彼は途中道端で寝込んでしまう。その当時ウィーンには「ペスト下僕」と呼ばれた人たちがいて、路上に転がるペストの犠牲者を収容し、市外に掘られた「ペスト穴」まで運ぶ仕事をしていた。アウグスティンはそうした「ペスト下僕」に疫病の犠牲者と勘違いされ、旧市街の西隣にある第7区ノイバウ (Neubau) の聖ウルリヒ (Sankt Ulrich) 教会の近くにあった「ペスト穴」の中へ放り込まれたとされている。目が覚めた彼は自分がどこにいるかを知って仰天するが、バグパイプを鳴らし、歌を歌うことで自らの存在を知らせ、救出される。こんな災難に出会ったにもかかわらず、彼は奇跡的にもペストに感染することなく、逆に自分の体験を歌にして倍旧の人気を得たという。¹⁰⁾

15世紀のペスト禍にまつわる以下の伝説は、「愛しのアウグスティン」以上に、ウィーン周辺部がその舞台となっている話である。旧市街の北西に位置する第9区アルザーグルント (Alsergrund) には、かつて「乙女が窓から見つめる処」(Wo die Jungfrau zum Fenster hinaussieht) と人々に呼ばれていた家があった。呼び名の由来を語る次のような言い伝えがある。1410年、ウィーンではペストが蔓延し、多数の感染者が出た。アルスバッハ (Alsbach) 川沿いの病院ジーヘンアルスも患者でいっぱいだった。この病院には有能かつ献身的な若い看護人がいた。彼はあるとき向かいの家の窓辺に大変美しい娘がたたずんでいるのを見つけ、すっかり心を奪わ

れてしまった。そして、この日を境に彼の熱心な仕事ぶりは影を潜め、暇を見つけては、病院の窓から娘の姿を眺めているのだった。いっぽう、娘の方も看護人に好意を抱いた様子で、彼の顔見たさに、一日の大半を窓辺で過ごすまでになった。やがて秋になった。いつまでも降り止まない雨のためアルスバッハ川は水かさが増し、ついに岸から溢れ出した。ほとんどの住民は高台に避難したが、娘は家に残って看護人の姿が現れるのを待っていた。しかし、そのとき既に看護人は自らベストに侵され、死の床にあったのだった。翌日、彼は息を引き取った。彼の遺品を整理していた同僚たちはその中にたくさんの貴金属類を発見し、驚きと憤りを禁じえなかった。しばらく以前から病院内で頻発していた盗難事件の犯人が判明したからである。憤慨した看護人たちは彼の遺体を窓からアルスバッハ川に投げ入れた。そして、それを見た娘は、後を追うべく、自分も奔流に身を投じたのであった。しかし、水底をさまよう娘の靈魂は、くりかえし自分の家の窓へと舞い戻り、愛しい人が再び姿を見せるのを待ち続けたという。¹¹⁾

オーストリアの存亡に関わる大事件であったトルコ軍によるウィーン包囲は、この街に数々の伝説を残したが、南西部の第13区ヒーツィング (Hietzing) には次のような言い伝えがある。スレイマン大帝自らが大軍を率いて帝都攻略を企てた第1次ウィーン包囲の時のこと、当時は小さな村であったヒーツィングの教区教会に奇蹟をもたらすというマリア像があった。トルコ軍接近の知らせを聞いた村人たちは、自分たちの財産を人目に付かない場所に移した。そのとき教会のマリア像も彼らの手によってうっそうと茂る樹の梢の中に隠された。そして住民たちは大急ぎで家を後にし、近くの森の中に身を隠したのだった。ついにヒーツィングにまでやって来たトルコ兵は建物という建物に火を放った。逃げ遅れた住民は、捕虜となった丈夫な若者を除いて、皆虐殺された。数日後、様子を見るために勇敢な四人の村人が森を出て村へ戻ったところ、待ち伏せていたトルコ兵に捕まってしまう、鉄の鎖を身体に巻かれ、一本の大きな樹に繋がれてしまった。偶然にも、それは彼ら自身がマリア像を隠した樹であった。自分たちは一体これからどうなるのか、激しい不安に駆られた彼らは救いを求めて頭上のマリア像に祈りを捧げた。すると、突然梢から彼らの方へ一筋の光が差してきたかと思うと、「お気をつけなさい！」という声が聞こえ、同時に、村人を縛っていた鎖がひとりごりに解けたという。四人は一目散に森の隠れ家へ戻って、皆にこの不思議な出来事を語ったのだった。¹²⁾

ヒーツィングの北隣、第14区ペンツィングには、ウィーン第2次包囲時の出来事として以下のような話が伝わっ

ている。トルコ軍がペンツィングに近づいているとの知らせを受けた住民たちは、荷物をまとめ、森の中へと避難を始めた。靴屋のロートターラー一家も牛の背中に食料と幼い二人の子供たちを乗せ、森へ向かった。一家には他に10歳になる息子のミヒャエルがいたが、彼には所有するヤギを無事安全な場所まで移動させる役目が与えられた。しかし、トルコ兵たちがいったいどんな格好をしているのか、気になって仕方がなかったミヒャエルは、わざとゆっくりついて行った。しまいには両親から逸れてしまった彼は、ちょうど通りかかった教会の門扉にヤギを繋いで、自分は塔の上へ駆け登った。程無くして塔の上にいるミヒャエルの目がトルコ兵の姿をとらえた。そのとき自分に課せられた役目を思い出した彼は、急いで階段を駆け下り、ヤギを繋いでいたひもを解くと、その身体を叩いた。彼の付き添いがなくとも自分で森の方へ逃げていくように。そうこうするうちに、トルコの軍隊はもうミヒャエルのいるすぐ近くまで迫っていた。こうして逃げ遅れてしまった彼がふと目をやると、そこには祈りのロウソクを捧げる灯明塔が建っていた。子供であったことが幸いして、なんとか彼は灯明塔の中へ潜り込むことができた。そして、ミヒャエルはトルコ軍が通り過ぎるまでそこでじっとしていたのであった。やがて森から様子を見に来た鍛冶屋がミヒャエルを見つけ、すぐさま両親のもとへ連れて行った。息子のことはもう半ば諦めていた両親がいかにかこの再会を喜んだか、それは言うまでもない。ちなみに、ペンツィング教会の灯明塔は現存し、今なお目にする事ができる。¹³⁾

III.

ウィーンの西部に広がる広大な森林地帯、いわゆる「ウィーンの森」は、さまざまな伝説の舞台となっている。前章が示しているとおおり、そうした伝説のなかには歴史上の人物や出来事と直接的なつながりを持つものも少なくはないが、人間の想像力が生み出した超自然的存在や不可思議な出来事に関するものがより多数を占めている。最も有名なものの一つが、第19区デープリングに属するカーレンベルク山に伝わる、次のような竜伝説である。

カーレンベルク山の竜

今から800年近く前のこと、カーレンベルク山の暗い洞穴に恐ろしい竜が棲んでいた。途轍もなく大きな竜で、その巨大な体はきらきら輝く緑色の鱗に覆われていた。怒ると、ものすごい唸り声をあげながら口を開け、電光石火獲物に喰らいつき、呑み込んでしまうのだった。特段腹を空かせているときは、小屋の中の

家畜を襲うこともあり、また、不用意にも棲み処に近づいてしまった人間を食べてしまうこともあった。

この怪物をなんとか始末しなければならぬ、というのが周辺の村に住む人々の一致した意見であった。長時間に及ぶ相談の後、大胆不敵な一人の若者がある有望な作戦を思いついた。彼は、屈強な男たち数人と一緒に幅の狭い木製の箱を作った。木箱の長さは竜の体長とちょうど同じになっていて、前方部分には怪物の頭がやっと通るほどの狭さの隙間が開けてあり、他方、箱の後方部分は開いていた。

竜が洞穴の中に引っ込んでいる間に、男たちは竜の棲み処の前まで木箱を運び、洞穴の入り口と箱の開口部が重なり合うように、木箱を周囲の樹木にしっかりと取り付けた。箱の前にはおとりとして仔牛が繋がれた。仔牛は必死になって鳴き声を上げる。それで竜を洞穴から誘き出そうというわけである。

そうして、男たちは木の間に隠れて待っていた。それからもうすぐのことだった。竜が仔牛の匂いを嗅ぎつけ、大きな唸り声を上げながら獲物めがけてとびかかろうとした。しかし、箱が邪魔だった。怪物は木箱の中に潜り込んだが、狙いどおり中で引っかかってしまった。勇ましい男たちは乾燥した木の枝をすばやく箱の上にほうり投げ、火を放った。竜は、もうもうたる煙に巻かれて窒息死したのだった。

その後、竜は皮を剥がされ、そして、鱗に覆われた硬いその皮は、成功裡に終わった作戦を考え出した若者の家の壁に吊るされた。皮は何年もの間そこにぶら下げられたままで、通りがかりの人々を驚かせたのだった。¹⁴⁾

第13区ヒーティングにも竜は棲んでいて、人々に危害を加えていたようである。その昔オーバー・ザクト・ファイト (Ober Sankt Veit) 一帯はうっそうとした森に覆われていた。今のラインツ動物公園 (Lainzer Tiergarten) のはずれ辺りの山腹に驚くほど大きな菩提樹が立っていた。この大木のうろには、7つの頭を持つ恐ろしい竜が棲んでいた。竜は仔牛や山羊といった家畜ばかりか、人間を襲うことも稀ではなかった。あるとき、家の前で遊んでいた幼い女の子が襲われた。竜は女の子をわしづかみにすると、そのまま森の方へ飛んでいった。母親は必死の思いで後を追ったが、子どもの居場所も分からないまま、森の中で道に迷ってしまった。しかし、偶然にも、森の中で隠棲生活を送っていた聖ファイトと出会い、彼に助けを求めた。同情した聖ファイトは母親と一緒に竜探しに出かけた。まもなく二人は木のうろの中で眠っている竜を見つけた。聖ファイトは手に持っ

ていたキリスト十字架像を怪物に向けて3回高く振りかざした。すると竜は息絶え、連れ去られた女の子も無事助け出されたという。¹⁵⁾

竜はキリスト教にとって悪魔の化身と見なされる存在であり、聖ファイトのかざした十字架によって竜が倒されるという上記の伝説は、言うまでもなく、きわめてキリスト教色の強いものである。

森には危険が潜んでいる。竜のように物理的な危害を人間に及ぼすものたちと並んで危険なのは、人間を誘惑してその魂を奪い取ろうとする輩、すなわち、悪魔が頻繁に出没する場所でもあるからだ。デープリングには、悪魔がウィーンの森に暮らす修道女にまで魔の手を伸ばしたという言い伝えがある。今から何百年も前のこと、ヘルマンスコーゲル (Hermannskogel) 山の頂上に大きな修道院が建っていた。そこに、修道院生活を始めてまだ日の浅い一人の若い修道女がいた。あるとき、自室にいた彼女は格子窓越しに声をかけられた。見ると、それは立派な身なりの狩人であった。狩人はそれから毎日のようにやって来て、彼女と窓辺で言葉を交わすようになる。やがて愛の言葉をささやくようになった男に、修道女の方も強く心惹かれるまでになっていた。ある日のこと、いつもより遅く現われた狩人は言った。「森の中で宝を見つけたよ。この宝を持ってどこか遠い国へ行き、そこで二人で暮らそう。」男の誘いに、修道女としての誓いも忘れた彼女は、わずかばかりの手荷物を持って、狩人に附いて修道院を抜け出した。しかし、二人が森の中までやって来たときだった。狩人の姿が見るまに大きくなったかと思うと、手には鉤爪が、頭には角が生え、足は蹄に変わっていた。こうして本性を現した悪魔は、哀れな修道女を引っ掴むと、大きな唸り声を上げながら、空の彼方へと飛んでいった。それ以来、ヘルマンスコーゲル山では、かの修道女の霊が、すすり泣きながら森の中を徘徊し、あちこちの石に十字架を刻んでいる、と言われている。¹⁶⁾

しかし一方では、パラツェルズス同様、森の中で出くわした悪魔をうまく出し抜いて、あるいは魔手を逃れ、あるいは富や幸せまでも手に入れた人間たちの話も少なくない。例えば、デープリングにある森、クラップェンヴァルドル (Krapfenwaldl) には次のような話が伝えられている。昔、一人の若い職人がカーレンベルク山に上った。切り株に腰を下ろして眺めを楽しんでいると、揚げたてのクラップェン [=揚げ菓子的一种] の甘い香りが漂ってきた。匂いにつられて下りていくと、一軒の食堂でちょうど謝肉祭のクラップェンを作っているところだった。しかし、もう久しく失業中であった職人にはクラップェンを買う金もなかった。かわいそうに思った

食堂の女将さんが、代わりに焼きたてのパンを一枚恵んでくれた。件の切り株まで戻って、貰ったパンを食べていると、とんがり帽を被り、赤いマントを羽織った痩せぎすの小男が突然目の前に現われた。男は、できあがったばかりのクラッペンが幾つものった大きな皿を手に持っていた。男に勧められるまま、腹一杯クラッペンを食べた職人に、見知らぬ男はこう言った。「お前さんの魂を私にしてくれると約束してくれたら、何でも望むとおりにしてやろう。富も、権力も、なにもかもお前さんのものだ。」しかし、悪魔と取り引きするつもりなどなかった職人は言った。「まずはお前さんの力を見せてくれ。最初は、何かばかでかいものに変身してみせてくれ。」職人は、恐ろしい巨人に変身した悪魔をほめたたえ、地面に落ちていたどんぐりの実を拾って、こう言った。「でも、こんな小さなどんぐりにはなれまい。」悪魔がどんぐりの実に変身したとたん、職人は、どんぐりをおもいきり踏みつけながら、悪魔と取り引きする気など自分には毛頭ないことを告げた。悪魔は降参し、職人はどんぐりの実を森の中へ力いっぱい投げ入れた。それ以来、この森は「クラッペンヴァルドル」(ヴァルドルは森の意)と呼ばれるようになったのである。¹⁷⁾

ウィーンの人々にとって、森は恵みや救いをもたらしてくれるものたちと出会う場所でもあった。そのような場所の一つが、デープリングの森の中に広がるイエーガーヴィーゼ (Jägerwiese) 原である。

白馬の男

夫に死なれた若い女が赤貧の生活にあえいでいた。住んでいた家も荒れ放題で、わずかばかりの所持金は、病弱の幼い子に食べ物を買ってやるにも足りないほどの額だった。彼女が隣人から聞いた話では、近くの森のはずれでは、援助が必要なもう何人もの人間の前に親切な妖精が現われ、生活苦を和らげてくれたという。

そこで女は子どもを暖かい布に包み、その子を抱いてジューヴェリング (Sievering) のイエーガーヴィーゼ原へと出かけた。目的地に着いた彼女は、疲れて木の切り株に腰を下ろし、そして、ぐっすり眠るよう膝の上にのせた子どもの体を揺すってやるのだった。妖精が現われるのをひたすら期待しながら、何時間も彼女はそこに座っていた。

突然、森の中から馬に乗った、貴族のような身なりをした一人の男が駆け出てきた。男は大層美しい白馬に跨っていた。白馬からは神々しい光が出ており、辺り一帯眩い光の渦に包まれたのだった。「こんな遅い時間に森の中で何を探しているのか？」と見知らぬこの男は尋ねた。

動揺した若い女は「薪を集めているんです」と答えた。すると、馬上の男は光り輝く自分の馬から身を乗り出して、一本の節くれた枝を地面から拾い上げ、それを女に渡した。男はやさしくこう言った。「この枝を持っていくといい。一束の薪全部よりもこの方が役に立つだろうよ！」そうして馬に乗った男は樹間に消えていった。若い女は子どもを抱いて家路についた、重たい枝を背中にくくりつけて。

翌朝枝を眺めた彼女は自分の目が信じられなかった。彼女が手に持っていたのは純金の枝だったのである。喜びは言葉では表わせないほどだった。なぜなら、今やすべての苦しみから解放されたのだから。こうして彼女は生涯最後の日まで子どもとともに裕福な生活を送ることができたのだった。

黄金を手にしたその日の晩、彼女は再びイエーガーヴィーゼ原に駆けつけた。なぜなら、謎に満ちたあの馬上の男に贈り物に対するお礼をぜひ言いたいと思ったからである。彼女は待ったが、徒労に終わった。あの貴族も彼の光り輝く白馬も二度と現われることはなかった。¹⁸⁾

イエーガーヴィーゼ原に関しては、ある夜、猟師見習いの若者がここで出会った不思議な行列に付いていき、素晴らしい水晶の城で一晩を過ごして帰宅したが、実際は1年が経過していたうえに、持っていたカバンには金貨が一杯詰まっていた、という同じくよく知られた言い伝えもある。¹⁹⁾

IV.

森とならんで、ウィーン周辺部の伝説と深い関わりを持っているものが水である。具体的に言えば、井戸や泉、あるいは、川が重要なモチーフになっている言い伝えが少なくない。

まず挙げられるのが、不思議な井戸の伝説である。昔、旧市街の南隣にある第4区ヴィーデン (Wieden) のとある農家の中庭に「飢饉井戸」(Hungerbrunnen) と呼ばれていた井戸があったという。普段はまったく水の出ない空井戸なのだが、干ばつがウィーンを襲い、まわりの井戸が干上がってしまうようなときには、逆にこの井戸からは水がほとばしり出るのであった。そして、干ばつが終息すると同時に、井戸は再び元の空井戸に戻るのであった。第4区を走るシェンブルク小路 (Schönburggasse) が19世紀末まで飢饉井戸小路 (Hungerbrunnengasse) と呼ばれていたのは、この言い伝えに因るものである。²⁰⁾ また、同種の「飢饉井戸」の伝説は第19区デープリングにも伝わっているという²¹⁾。

第19区デープリングの森の中には、不思議な泉として有名な「アグネスの泉」(Agnesbründl)がある。この泉は、その水に病気を治す力があるとか、また、中をのぞくと宝くじの当選番号といった幸運をもたらす数字が見えると言われ²²⁾、昔から大勢のウィーン人が訪れる場所であった。また、ここにはアグネスという名前の妖精が棲んでいたという伝説もあり、彼女が困窮した人々に薬草や黄金を贈り、幸運を呼ぶ数字を教えたとも言われている²³⁾。

丘陵地を成しているウィーンの森からウィーン盆地に向かっては、アルスバッハ川、オッタクリンガーバッハ(Ottakringerbach)川、マウアーバッハ(Mauerbach)川、ウィーン川など、何本もの川が流れている。現在ではいずれの川も河川改修工事が施され、大部分が暗渠化しているが、その昔は雪解けによる増水や大雨によってたびたび氾濫し、被害をもたらした。第Ⅱ章で言及した「乙女が窓から見つめる処」という伝説にもアルスバッハ川の洪水が登場したが、同じ第9区に伝わる「飛ぶ家」(das fliegende Haus)伝説においては、アルスバッハ川の増水が話の発端になっている。昔、ヨーハン・トゥーリーという名のレンガ製造業者がアルザーグルントに一軒の大きな家を建てた。ある春の夜のこと、流れる水の音で目を覚ましたトゥーリー夫妻が窓から外を眺めると、いつの間にかアルスバッハ川の水かさが増し、家の周囲までもう水浸しであった。「どうして俺はこんなひどい土地に家を建ててしまったんだろう。カーレンベルク山の上だったら、どんなに素晴らしいだろう」と彼が口にしたとき、とんがり帽をかぶったちいさな小人が突然目の前に現われ、「自分はこの家の精だ。おまえの望みどおりにしてやろう」と言うのだった。途端に家全体が持ち上がり、カーレンベルク山目指して飛んで行った。しかし、山の上の暮らしは期待していたものとは随分異なっていた。確かに眺めは素晴らしかったが、仕事場との往復から水汲みに至るまで、何もかも大変だった。トゥーリーが次に望んだ居住地は、ガッターブルク(Gatterburg)城(現在のシェーンブルン(Schönbrunn)宮殿)近くの森の中だったが、今度は皇帝の狩りの一行に家の庭を荒らされる始末。そして、三度目に夫婦が家を移したのは、ウィーン市のど真ん中、コールマルクト(Kohlmarkt)広場に面した市街地だった。あまりの喧騒に二人はただ驚くばかりであったが、加えて隣家が火事になるに及んで、けっきょく彼らが最後に望んだのは、アルザーグルントの元の場所に戻ることであった。この伝説の主人公トゥーリーは、第9区にあるトゥーリー小路(Thurygasse)に今もその名を残している。²⁴⁾

森と同じく、川もまた超自然的存在の棲み処であった。そのなかでもよく知られたものの一つが、ウィーン川流域に数多く残る「水男」(Wassermann)ないしは「水の精」(Wassergeist)の伝説である。例えば、西部の第15区ルードルフスハイム＝フュンフハウス(Rudolfsheim-Fünfhaus)には、次のような言い伝えがある。

ウィーン川の水男

今から何百年も前のこと、ウィーン川の堰堤の上流に水男が棲んでいたという。それは、髪の毛が緑色、短軀で、奇妙な姿をした小男だった。男は青いボタンの付いた灰色の上着を着、黄色いズボンをはいていた。昼間は水中にある煌びやかな水晶の城の中で眠っていて、日が暮れ、夕べの祈りを知らせる教会の鐘の音が響くとともに水面に浮上してきて、髪の毛をくしけずりながら、深みに引きずり込む犠牲者を待ち受けるのであった。溺死者の魂は、美しい装飾を施した入れ物に入れて、水の精が自分の部屋に保管していた。

その頃ガウデンツドルフ(Gaudenzdorf)にある毛皮加工職の親方が住んでいて、生業を営んでいた。彼は泳ぎがとても上手だと評判だった。ある夕方、一日の仕事を終えた彼は自分の泳ぎっぷりを少々自慢したくなり、ウィーン川でひと泳ぎして来ようと職人たちを誘った。

彼らが川岸に着いたとき、ちょうど近くの教会の鐘が鳴った。水男の話を知っていた職人たちは、不安げに親方に言った。「親方、これから黄昏時になります。水男がこれまで大勢の人間を深みに引きずり込んだ時間ですよ！」

親方は呵呵と笑いながら、職人たちを臆病者とばかにした。そして、ひと跳び、向こう見ずにも流れの中に跳び込んだのだった。その時、一番歳の若い職人が叫んだ。「柳の木の下に水男がすわって、金の櫛で髪の毛を梳いています！逃げてください、手遅れにならないうちに！」

しかし、毛皮加工職の親方はその言葉に耳を貸そうとはせず、まさに水中の魚のようにすいすい泳ぎながら、こう叫んだ。「水男なんぞ、くたばってしまう方がいい！」

その時ものすごい突風が吹き、川面が激しく波立った。親方は、彼をあざ笑う水男によって力づくで深みへ引きずり込まれたのだった。職人たちは全速力で川岸を離れたので、無事であった。²⁵⁾

川をめぐる伝説のなかでもっとも有名なものは、ウィー

ン盆地を北から南東に向かって貫いているドナウ川の水の精「ドナウの乙女」(Donauweibchen)の言い伝えであろう。ウィーンでは、市立公園(Stadtpark)をはじめ各所で、伝説上の存在である彼女の像を目にすることができる。

ドナウの乙女

昔、ウィーンがまだ小さな町だった頃、ドナウ川は幾つもの支流に分かれて、水郷地帯の森の中を流れていた。そして、たくさんのみすぼらしい漁師小屋が市壁の外に建っていた。こうしたあばら家の一つに年老いた漁師のニクラス・ツォーゲルマンが息子のベルトルトと住んでいた。

ドナウ川が完全に氷結してしまう冬、ふたりは春の漁に備えて、網の修繕をするのだった。凍てつくばかりに寒いある冬の晩、吹雪がびゅーびゅーいながら、窓の罫戸の隙間からも入ってきた。ベルトルトは暖炉の火を強めた。そして、父と息子は夜のひとときを語りながら過ごした。歳を重ねたニクラスは、水の精について手に汗握る話をたくさん語って聞かせることができた。

ドナウ川の底に、ほのかに光る水晶の宮殿が、手入れの行き届いた水中庭園に囲まれて建っている。そこには、ドナウの王、彼の奥方、彼の息子たち、そして、じつに美しい水の精ニクセである彼の娘たちが棲んでいる。幾つもある大きなテーブルの上にはガラスの壺がさかさまに置かれていて、中には溺死者の魂が閉じ込められている。満月の夜、ドナウの王は時々狩人の格好をして川岸に沿ってぶらぶらすることがある。誰も彼に話しかけてはならない。そんなことをすると、ドナウの王は話しかけた人間をひっつかまえて、ドナウ川へと連れて行ってしまふ、永遠に。

しかし、最もベルトルトの心に残ったのは、魅惑的な水の精ニクセの話だった。それはしなやかで芳しい服を身にまとった、金髪で巻き毛の可愛らしい娘で、その魅力的な歌声にもう何人もの若者がドナウ川の中へと誘い込まれたのだという。若者は懐疑の念を抱きながら父親の話に耳を傾けていた。というのも、彼はこれまで一度もニクセと出くわしたことがなかったので、父親の言うことが完全には信じられなかったのである。

突然、風が吹いて部屋の戸がぱたんと開いた。部屋の中に不思議な光が広がった。この光の真ん中に、銀色の微光を発する服を着たじつに美しい少女が一人立っていた。彼女の長くて金色の巻き毛には白い睡蓮の飾りが付いていた。「怖がる必要はありません！私は水

の精ニクセです。あなたたちに危険を知らせるために来ました。まもなく南風が吹いて雪解けとなるでしょう。川に張った氷が割れて増水し、水郷地帯は水没するでしょう。安全な所へお逃げなさい、そうしないと命を落とすこととなりますよ！」ベルトルトはまるで石にでもなったかのように立ちつくし、麗しいニクセの顔を眺めていた。彼女は彼に微笑みかけた。と思うやいなや、もう彼女の姿は消えていた。

父と息子の二人はひとときも無駄にすることなく、すぐに他の漁師たちの小屋へ駆けつけ、この出来事を語った。大急ぎで全財産を一つにまとめ、全員が家族とともに市壁に護られたウィーン市内へと避難した。

翌朝にはもう氷がバリバリいいながら割れる音が聞こえてきた。ドナウ川は溢れて広い湖のようになり、畑や水郷地帯は水没してしまった。小屋はことごとく浸水した。しかし、ニクセの警告のおかげで、最悪の事態は避けられ、住民も家畜も溺死したものはいなかった。

数週間後、氾濫した水がひくと、漁師たちは泥を片付けて、小屋を再び住める状態にする作業に取りかかった。以前の生活が戻ってきた。人々は災害前と同じように自分の仕事に精を出した。

ただベルトルト・ツォーゲルマンだけは、もう心晴れやかな気分にはなれなかった。あの優しいニクセを見て以来、彼女のことが忘れられないのだった。毎日舟で漁には出るが、仕事をしていてもわの空といった様子だった。

ある日、彼はうっとりするような歌声が川の向こうから響いてくるのを聴いた。彼は小舟に乗り込み、いったんは川上に向かって漕ぎ出したが、やがて流れに身を任せようだった。

その夜、ベルトルトは家に帰って来なかった。朝もやの中、父は息子を探しに出かけた。誰も乗っていない小舟を見つけ、そちらに近づいた。ふと気がつくと、彼のいる辺りの水はどこまでも澄んでいて、透明であった。遙か下方、ドナウ川の底に彼が見たもの、それはドナウの王の宮殿と素晴らしいその庭園だった。そして、水中に咲く花々のなか、彼の息子とニクセが手を取り合って歩いていたのである。²⁶⁾

V.

以上見てきたように、ウィーン周辺部の伝説には森と水辺にかかわるものが数多くあり、それが大きな特徴になっている。第II章で示した歴史上の人物や出来事にまつわる伝説においても、森や川はすでにさまざまな形で登場していた。ロイエンタールがスマイレの花を見つけたのはカーレンベルク山の山腹、パラツェルズスが悪魔と

出会ったのはノイヴェルデックの森の中、そして、2度にわたるオスマン・トルコの来襲にまつわる伝説のなかで住民たちが避難場所としたのはいずれもウィーン周辺部の森だった。また、ルドルフ4世の命で魔女と司祭が溺死させられたのはドナウ川、ヴィルヘルム大公率いる皇帝軍が侵攻してきたスウェーデン軍と激戦を演じたのはドナウ川沿いの水郷地帯、そして、ペスト禍にまつわる伝説のなかで娘が入水したのは増水したアルスバッハ川であった。

森と水辺にかかわる伝説において数多く登場するのが超自然的存在である。ウィーンの森にも竜や悪魔が出没し、家畜や人を襲い、あるいは、人間の魂を狙っている。ウィーン川やドナウ川には水男や水の精が棲み、人間を水底に引きずり込んで、溺死者の魂を集めている。ウィーン周辺部においても、かつて森には獣や盗賊が徘徊して人々に危害を加え²⁷⁾、川では不慮の溺死や洪水による被害が後を絶たなかった。伝説中の超自然的存在は、こうした森や水辺に潜む危険が形象化されたものという側面を有していることは明らかであろう。

いっぽうで、森や水辺は人々にさまざまな恩恵をもたらしてくれる場所でもあった。本論で取り上げた伝説は、ウィーンの森が薪拾いや狩猟の場となっていたこと、ドナウ川が漁場であったことを示しているが、さらに、戦時においては、森は住民の避難場所、川は自然の防衛線として、重要な役割を果たしていたことをも伝えている。森と水辺にかかわる伝説に登場する超自然的存在のなかには、イエーガーヴィーゼ原の白馬に乗った男やアグネスの泉に棲む妖精など、苦境にある人たちに富や救いをもたらしてくれるものがいた。同じく超自然的存在ではあっても、これらが象徴的に表現しているのは、自然の脅威ではなく、森と水が人々にもたらす恵みであることは言うを俟たない。

こうして、ウィーン周辺部の伝説の中に強く流れているのは、森と水の記憶である。それは、この地の住民たちの生活が、良きにつけ悪きにつけ、森そして水と深い係わり合いをもっていたことを表している。また、これらの伝説に数多く登場する超自然的存在には、人間に害をなすもの、逆に、人間に福を授けてくれるものとがみられるが、それらは、森と水が人々にもたらす脅威と恩恵がそれぞれ形象化されたものとして、まずは捉えることができるだろう。

森と水に関するウィーン人の集合的記憶は、このように基本的にはアンビヴァレントなものである。しかし、ここで注意しておかなければならないのは、ウィーンの人々は周囲に広がる森や水辺といった自然に対して過度の恐怖心は決して抱いていなかったように思われる点

である。人間とは敵対的關係にあるとみなされる超自然的存在の有様をもう一度見てみよう。人々を苦しめていた竜は村人や聖者によって最後には退治される。狙いどおり人間の魂を手に入れた悪魔もいるが、逆に人間に出し抜かれ散々な目にあう間抜けな悪魔も少なくない。水男が溺死させるのは晩鐘後に川に入る人間だけであって、周辺住民には一切危害を加えないという水の精もいる²⁸⁾。魅力的な歌声で若者を死に追いやるドナウの乙女は、川の氾濫を知らせに人間の前に現われ、漁師たちの命を救ってくれることもある。

ウィーンの人々にとって、ウィーン周辺部の自然は彼らに対して時に危険を及ぼすことはあっても、けっして絶対的な力をもって彼らの前に立ちはだかるような破壊的な存在ではない。人間が節度を保ってつきあう限り、危険に勝る恩恵を施してくれる存在である。たとえ危険な一面をみせたとしても、人間が知恵と力を — 場合によっては神様の力を借りながら — 発揮すれば十分に克服することが可能な自然なのである。これが、ウィーン周辺部の伝説の底に流れている自然観であるように思われる。

註

- 1) ヤーコブ・グリム / ヴィルヘルム・グリム『ドイツ伝説集 (上巻)』(桜沢正勝・鍛冶哲郎訳) 人文書院 1987年、i-iii ページ。
- 2) 野村純一ほか編『昔話・伝説小事典』みずうみ書房 1987年、170ページ
- 3) 本論で云う「ウィーン周辺部」とは、かつてVorstadt (市外地区) ならびにVorort (郊外地区) と呼ばれていた地域を指している。市壁に囲まれていた旧市街の周りがVorstadt、さらに、そのVorstadtを取り囲んで広がっていたのがVorortである。これらの地域は19世紀半ばから徐々にウィーン市へと編入され、現在ではウィーン市の第2区から第23区となっている。本文中に記される街区名は、現在使われているこれらの行政区名称である。
- 4) Vgl. Eva Bauer (Hrsg.): *Wien in seinen Sagen*. Weitra (Verlag publication PN^o1 - Bibliothek der Provinz) 2001, S.247f. [以下、EBと略記]
- 5) Vgl. EB, S.316f.
- 6) Vgl. *Die schönsten Sagen aus Wien*. Wien (Hirtl Bücher) 1992, S.48ff.
- 7) Vgl. EB, S.152ff. und Reingard Witzmann: *wunder. orte / zauber. zeichen. Sagenwege durch Wien*. St.Pölten u.a. (NP Buchverlag) 2005, S.64ff.
- 8) Vgl. EB, S.287ff.
- 9) Vgl. EB, S.268ff.

- 10) Vgl. EB, S.194ff.
- 11) Vgl. EB, S.215f.
- 12) Vgl. EB, S.241ff.
- 13) Vgl. EB, S.249ff.
- 14) EB, S.296f.
- 15) Vgl. EB, S.239f.
- 16) Vgl. EB, S.293ff.
- 17) Vgl. EB, S.305ff.

ウィーン北部の第21区フローリッツドルフ (Floridsdorf) の森にも悪魔の伝説がある。ここでも悪魔は人間に一杯食わされるのだが、それはこんな話である。一人の作男がビーザムベルク (Bisamberg) 山の森で出会った悪魔から死後の魂と引き換えに山ほどの金貨を手に入れる。いっぺんに金持ちになった彼は、相思相愛だった農家の娘とも結婚することができた。機知に富んだ作男は、悪魔と契約を結ぶにあたって、悪魔が彼の魂を我がものにできる条件をもう一つ加えていた。その条件とは、二人の隣に立っていたオークの木の葉がすべて落ちてしまうことであった。しかし、悪魔の期待に反して、秋になっても、さらには、冬がやって来ても、オークの木の枝からすべての葉が落ちてしまうことはなかった。そして、春の到来とともに、オークの木は再び若葉でいっぱいになったのである。やっと自分が騙されたことに気づいた悪魔は、かんかんに怒り、唸り声を上げ、硫黄の悪臭をふりまきながら、冥界へと帰っていったのであった。(Vgl. EB, S.321ff.)

- 18) EB, S.301ff.
- 19) Vgl. EB, S.284ff.
- 20) Vgl. EB, S.163ff.
- 21) Vgl. „Der Hungerbrunnen" im 19. Bezirk Döbling. In : <http://www.sagen.at/>
- 22) Vgl. EB, S.281ff.
- 23) Vgl. „Der Sieveringer Sagenkreis um Karl und Agnes XVII" im 19. Bezirk Döbling. In : <http://www.sagen.at/>
- 24) Vgl. EB, S.209ff.
- 25) EB, S.255f.
- 26) EB, S.313ff. (付言：この伝説は、一般的に第20区ブリギッテナウにまつわる伝説の一つとされている。)
- 27) 第4区ヴェーデンには、ウィーンの森に棲む熊が市中に現われたという「熊水車小屋」(die Bärenmühle) の伝説、さらには、「森の悪魔」(Waldteufel) と呼ばれ、人々に恐れられたウィーンの森の盗賊にまつわる伝説が伝わっている。(Vgl. EB, S.168f. u. S.159ff.)
- 28) Vgl. EB, S.233f.

(平成22年 7 月12日受付)